# 二〇二五年度
# 上宮学園中学校入学考査問題（一次入試一般学力型午前）

# 国語

（注意）

（1）この問題用紙は、「開始」の放送があるまで開いてはいけません。

（2）問題は一から三までであります。試験時間は五十分です。

（3）解答用紙は別に一枚あります。

（4）解答用紙には、必ず受験番号・名前を記入しなさい。

（5）「終了」の放送で、筆記用具を置きなさい。

## 一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

離島の辰島に暮らす竜太は中学二年生。将来は漁師になりたいと思っている。都会から父の仕事の都合で引っ越してきた　同じく中学二年生の灯子は、島に深い愛着を感じている。ある時、竜太と灯子と一年生の勇気は、学校の文化祭で展示発表をすることになる。辰島にある神社について調べたローカル新聞を作成することにした三人は、辰島で生まれ育った、七十六歳で現役漁師のトクさん（下出徳治）から話を聞き、記事を書いた。

灯子の母がいっていたように、秋分の日をさかいに、日の入りが日々、思いきりよくみじかくなっていく。そのぶん夜が長くなる。

午後七時は、ひと月まえまでは夕方の七時といってもいい明るさだったのに、いまや完全に夜の七時だ。いわゆる街のあかりというものがなく、人通りがたえた辰島では、深夜の七時といっても通用しそうだ。漁船が帰ってきて、港が活気づくのは、もうすこしおそい時間だ。

民家の窓からカーテンごしにもれる、ほのかな光をたよりに、竜太はとちゅうで勇気、灯子と落ちあいながら、トクさんの家にむかって歩いた。島の南西にある集落の中にある、板ぶきの古い家だ。

ランチ取材から一週間後。

放課後は毎日、土日も返上してがんばったかいがあって、〈辰島ニュース〉のソウカン号（あ）ができた。まっさきにトクさんに見てもらいにいく。

文化祭まであと一週間あるけれど、今週末から三連休になるので、今週中に印刷して、文化祭のまえに島内の各家にハイフ（い）するというスケジュールになっている。変更があればまだまにあうので、トクさんにチェックしてもらうためでもある。トクさんは、きょうは漁を休んだ。網仕事にあて、七時ぐらいなら帰っているから、そのころにくるようにといわれている。

三人がおとずれたとき、トクさんはテレビをみながら、夕食を食べているところだった。食卓には、大きな鍋とお椀、焼き魚がのった皿、缶ビールなどがならんでいる。

「ちょうどよかった。トクさん、おみやげがあるよ」

といって、灯子が勝手知ったわが家のようにあがりこみ、台所へいき、持ってきた手みやげの惣菜（そうざい）を皿にうつし、食卓にはこんでくる。サバの南蛮漬（なんばんづ）け、トクさんの好物だそうだ。

［ア］

「おまえたちも食べていくか」

トクさんにそういわれると、灯子はふたたび台所へいき、三つのお椀とはしを持ってきた。①竜太はあっけにとられた。

「いつのまに？」

「あれから二度ほどきたか？　タラを持っていくと、つぎの日、この子がサバの南蛮漬けを持ってきてくれるんだ」

と、トクさんがこたえた。

あれから、とは、トクさんに神社の話をきいたあの日から、という意味だろう。

「お母さんが、持っていけっていうのよ」

と灯子はいったが、食卓のまわりで主婦のように立ち働きながら、なんだか楽しそうだ。トクさんもうれしそうだ。わるくない取りあわせだと竜太は思った。トクさんはひとり暮らしだし、灯子はこの島にとけこもうとしているわけだし……。

「じゃあ、いただきます」

竜太は食卓についた。夕食はまだだ。父、祖父、航平（こうへい）が（きょうは、えびす丸にのっているはずだ）帰ってきてからになるので、漁があった日の竜太の家の夕食はおそくなる。灯子が大鍋から取りわけてくれたお椀を受け取り、さっそく口をつける。みそ仕立ての漁師鍋だ。野菜と雑多な魚介類（ぎょかいるい）がはいっていて、いい味になっている。勇気と灯子も食べはじめ、トクさんはめがねをとりにいってから、「どれどれ」と〈辰島ニュース〉を手にとった。

一面は、トクさんの写真つきの神社の記事、といっても、トクさんの話したことをそのままのせてある。そして、神社の絵が三枚。三枚しか必要ないとわかっていて、灯子は全部の神社を写生した。できたものの中から、気にいった三枚を自分でえらんだのだ。

「弁天(べんてん)さま、よくかけているでしょ」

トクさんのよこから紙面をのぞいて、灯子がいった。よほど気にいっているのか、だれにでもそうじまんしている。

「航平さんに、ほめられたんだから」

［イ］

「いつ？」

「かいているときに。絵が上手なんだねって」

著名な画伯(がはく)にでもほめられたかのように、灯子は誇(ほこ)らしげだ。航平が、写生をしている灯子に声をかけたこと、「よけいなこと、もういったかもな」といっていたことを竜太は思いだした。

「それで、はりきって、全部かいたんだ」

全部かいた灯子を、さすがにきちんとしている、えらいな、とソンケイしていたのに。公正に判断すると、航平がいったことはよけいなことだったとはいえないだろうが、航平はじつに女性への接し方が巧(たく)みで、まったくしらけてしまう。

「それでってわけじゃないよ」

と、灯子は（　A　）いいかえす。

「じゃあ、どうして全部かいたんだよ」

「かくのが楽しかったからよ」

「ほめられたから、だろ」

「［　X　］」

と、勇気がさえぎって、灯子は「そうよ」とむくれたままでつぶやいた。

トクさんは、そんな会話など耳にはいっていないようすで、紙面に（　B　）見いっている。

「絵も記事もよくかけている。上出来だ」
うらがえして、ランチとレシピ紹介にもざっと目をとおす。
「文化祭はいつだ」
来週だとこたえると、トクさんは自分が船をだして、倉部まで送っていってやろうと申しでてくれた。
学校行事で本校へいくときは、島を午後にでる定期船ではまにあわないので、生徒の親が持ち船をだして送りむかえをするのが慣例になっている。それが、勇気の家の大黒丸になるのか、竜太のえびす丸になるのかは、いまのところ未定だった。
トクさんは、自分がすくなからずめんどうを見た〈辰島ニュース〉に、さいごまでかかわりたいのかもしれない。気持ちをくみとって、じゃあ、②そうしてもらおうかな、ということになった。
「ついでに文化祭の見物にくればいいのに。その日は一般のひともきていいのよ」
と灯子はさそったが、それにはトクさんはがんとして応じなかった。写真がのっている当人としてはてれくさいのか、それとも学校という場所に気おくれがあるのかもしれない。
「くばるのが楽しみだな」
といいつつ、〈辰島ニュース〉をかえしてくれようとするので、それはトクさんのぶんで、印刷すればいくらでもあるのだと説明すると、トクさんは立ちあがって、それを居間の壁にはった。③もちろん、表が見えるようにして。
「そうか。この絵を航平がほめてくれたか」
トクさんはにこにこしながら灯子をふりむき、竜太に視線をうつす。
④「竜太は、いい兄きを持ったな」
どっこが！　思いきりことばで否定するかわりに、竜太は腰をあげ、玄関に移動した。
「ごちそうさん。じゃあ、おれたち、もう帰るから」

うながされたように灯子と勇気も、（　C　）玄関にやってくる。トクさんもこっちに見送りにでながら、ほんのついでのように口にした。

「航平にセイビをたのんだら、船の調子がよくなったよ」

竜太はくつをはきかけていたので、かがんだままで「へえ」と、なにげなくへんじをした。

「あいつとでると心強いな」

これには心底びっくりして、思わずトクさんに顔をむけた。

「船の操作も安心してまかせられるし」

そこらのド素人とはちがうのだ。船舶免許は持ってなくても、それぐらいできるだろう。子どものころから、父のすることはそばで何度も見ているのだから。竜太だってできる。

「沖でエンジントラブル起こしても、なんとかしてくれるだろうしな。またたのむっていっておいてくれ」

［ウ］

竜太は（　D　）大きく息をすいこんだ。

「直接、本人にいえばいいだろ」

「ああ、そうだな」

トクさんはそういって、ニヤッとわらった。

灯子が、じっと竜太を見ている。目をあわせて、

「なに？」

とたずねると、灯子はかたほうのまゆだけをクイッと器用にあげた。

「トクさんって、名人だね」

［エ］

「なんの」

ききかえしたまま、こたえをまたずに、竜太は夜道を歩きだした。自分をとりかこむ空気が、やさしくやわらかくなっているのを感じながら。

人望があついわけだ。トクさんは［　Y　］名人だ。

（杉本　りえ『明日は海からやってくる』による）

問１　――線部**あ**～**え**のカタカナを、それぞれ漢字に直して答えなさい。

問２　――線部①「竜太はあっけにとられた」とありますが、その理由を説明した次の文の［　　］に入る言葉を、文中の言葉を使って、**三十字以内**で答えなさい。**（句読点も一字に数えます。）**

トクさんの家にいるのにもかかわらず、［　　］から。

問３　（　A　）～（　D　）に入る言葉として**ふさわしいもの**を、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。**（一語一回に限ります。）**

ア　いそいそと　　イ　ひっそりと　　ウ　じっくりと

エ　ゆっくりと　　オ　うきうきと　　カ　むっつりと

問４　［　X　］に入る言葉として**ふさわしいもの**を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　トクさんにどちらが正しいか決めてもらおうよ

イ　ほんとうに上手な絵だと、ぼくは思ったよ

ウ　そんなこと、どっちでもいいじゃないか

エ　ぼくも絵をかきたかったのに残念だ

問５　――線部②「そうしてもらおうかな」とありますが、だれがどのようなことをするのですか。その内容として**ふさわしいもの**を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　トクさんが〈辰島ニュース〉の編集をさいごまで手伝うこと。

イ　勇気と竜太のどちらの親が持ち船をだすのかをトクさんが決めること。

ウ　トクさんが文化祭の見物に三人の学校へいくこと。

エ　文化祭の日にトクさんが三人を自分の船で送っていくこと。

問６　――線部ａ「がんとして」、ｂ「気おくれ」の文中での意味として**ふさわしいもの**を、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ａ「がんとして」

ア　腹を立てて

イ　かたくなに

ウ　弱気になって

エ　まよいながら

ｂ「気おくれ」

ア　ためらう気持ち

イ　いらいらする気持ち

ウ　はずかしく思う気持ち

エ　なつかしく思う気持ち

問７　――線部③「もちろん、表が見えるようにして」とありますが、トクさんがそうした理由を説明した次の文の［１］・［２］に入る言葉を［１］・［２］ともに**十字**で、文中から**ぬき出して**それぞれ答えなさい。**（句読点も一字に数えます。）**

自分が［１］のせてある自分の［２］が表に印刷されていたから。

問８　――線部④「竜太は、いい兄きを持ったな」とありますが、トクさんが竜太にこのように話しかけた理由として**ふさわしいもの**を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　航平が灯子の絵をほめてやる気を出させたことに感動し、その気持ちを竜太に伝えたかったから。

イ　竜太が航平に対して不満を持っていることに気づいて、その不満をやわらげようと考えたから。

ウ　航平がすぐれた漁師であるということを竜太に伝え、竜太にやる気を出してもらいたかったから。

エ　自分の漁を航平に手伝ってもらうために、弟の竜太に自分がほめていたことを伝えてもらいたかったから。

問９　［　Y　］に入る言葉として**ふさわしいもの**を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　ひとを上手にほめてやる気をださせる

イ　自分の考えをひとにわかりやすく伝える

ウ　ひととひとの、気持ちのバランスをとる

エ　ひとの苦手なことに適切なアドバイスを送る

問１０　次の文を本文に入れるとしたらどこに入りますか。文中の［**ア**］～［**エ**］から一つ選んで、記号で答えなさい。

| |
|---|
| えっ、それは初耳だ。 |

**二**　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

突然ですが、質問です。

「人生や世の中って、辛いことが多いと思いますか？　楽しいことが多いと思いますか？」

僕は、塾の卒塾式で卒塾していく学生たちによくこの質問をします。皆さんも考えてみてください。

実は会場で手を挙げてもらうと、毎年、「辛いことが多いと思う」と言う人がほとんどです。人生は楽しいことばかりだと言う人は、１００人いたら２～３人くらいしかいません。

（　A　）、僕がいつも不思議に思うのは、なぜまだ社会に出ていない学生が「世の中は大変だ」と思うのか、です。

会場では９割以上の人が「人生や世の中というのは辛いものだ」に手を挙げますが、彼らは学生として親に保護されていて、社会人としての経験はありません。ある意味で、世の中は辛いとか大変だと言える段階には①ないはずですよね。まだ世の中を経験していないのですから。

それなのに、なぜ「人生や世の中は辛い」と思っているのでしょう？

それは、周りの大人が皆、そう思っているからです。

ここが②重要なポイントです。

周りが皆、「人生は辛いもの」とか「世の中は甘くない」と言っているから、それを聞いて育った人もそう思い込んでいる。自分ではほとんど経験していないのに。

それは親だけではありません。親戚や地域の大人たち、学校の先生、部活のあシドウ者もそうでしょう。

そういう人たちも、子どもの頃から大人からそう聞いて育ってきているから、③下請けのまた孫請けのような形で、「人生は辛いもの」「世の中は厳しいもの」という思想が根付いてしまっているのです。

最初に言っておきます。

誰かの言う「人生は辛いもの」「世の中は厳しいもの」は間違っています。

君たちはそんな言葉を信じてはいけません。

僕がそう言いきる理由は２つあります。

理由の１つ目は、君たちはまだ社会を経験しておらず、④「人生は辛いもの」というのは伝聞情報でしかないということです。

自分自身で経験していないのですから、この段階ではまだ正しい情報とは言い切れませんよね。

理由の２つ目。そのように「人生は辛いもの」という情報を君たちに伝えた人たちは、釣った鯛をそのまま食べている「加工の下手な人たち」だからです。

何を言っているのかわかりませんよね。説明しましょう。

鯛という魚がありますね。刺身や煮つけや鯛茶漬けにしても美味しいし、おめでたい席では尾頭付きで出されます。魚が苦手な人以外であまり嫌いという人は聞いたことがありませんが、では、鯛の刺身が好きだという人に、釣ったままのウロコがついたジョウタイで食べさせたら、相手は何というでしょうか？

ぬるぬるしているし、ウロコは硬いし、これは美味しいとかぶりつく人はたぶんいないでしょう。

（　B　）、その鯛はどうしたら美味しくなるのかというと、切れ味のいい包丁でウロコをとり、皮をそいで、三枚などにおろして、身を切ればいいのです。そこに美味しい塩や醤油、新鮮なワサビを付けたら、もっと美味しくなるでしょう。

あるいは、それを素敵な⑤夜景を見られる場所で好きな人と食べたら、さらに美味しくなるでしょう。

何が言いたいかというと、人生が辛いとか大変だと言っている人というのは、こうした手間や工夫をハブいて、生で食べている人だということです。

反対に、「鯛ってすごく美味しいよね」と言っている人は、適切な調理をして、美味しくなる工夫をして、好きな人たちと一緒に食べている人

です。

（　C　）、さまざまな手間や工夫で、人生をうまく調理している人です。

手間をかけたり工夫をしたりしない人が「人生は辛いもの」「世の中は厳しい」と言っているのです。［　X　］。その人の人生が辛かったというだけの話です。むしろ聞くべきではないかもしれません。

なぜなら、それはサッカーが下手な人にサッカーのアドバイスを受けるようなものだからです。

ボールを蹴ろうとしたら、スカッと外れてコロんで頭を打って、「サッカーって、なんてひどいスポーツなんだ！」と嘆いている人にサッカーを教えてもらおうとしても、意味がないどころか逆効果ですよね。「こんなスポーツ、やめたほうがいいよ」と言われるのが関の山（注）でしょう。

僕が怖いと思うのは、「人生は辛いもの」と捉えている大人が世の中のほとんどだということです。

ただし、これは、君たちの周りの大人がひどいとか、ダメだという話ではありません。その人たちを責めるのは間違いです。

僕が本当に伝えたいのはここからです。

多くの人が「人生は辛いもの」と捉えているとしたら、世の中には改善の余地がまだたくさん残されている、ということです。

皆が「人生は楽しい」と思える世の中は素晴らしいと思いますが、改善の余地はあまり残されていないということです。

でも、「人生は楽しい」と思う人が全体の２％しかいないのであれば、あと50倍は楽しくできるし、世の中をよくすることができる。それによって、君も、君の周りの人たちも今よりもっと幸せになるはずです。

そして、そういう世の中をつくっていくのが君たちであり、また僕なのだと思っています。

（坪田　信貴『やりたいことが見つからない君へ』による）

注　関の山……多く見積もってもそこまでだということ。

問１　――線部あ～えのカタカナを、それぞれ漢字に直して答えなさい。

問２　文中の（　Ａ　）～（　Ｃ　）に入る言葉として**ふさわしいもの**を、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。**（一語一回に限ります。）**

ア　では　　イ　つまり　　ウ　および　　エ　しかも　　オ　でも　　カ　それとも

問３　――線部①「ない」と同じ働きのものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　私の弟はあまり本を読まない。

イ　その川で泳ぐのはあぶない。

ウ　あなたの考えは正しくない。

エ　姉は今日パーティーに来られない。

問４　――線部②「重要なポイント」とありますが、筆者の考える「ポイント」とはどのようなものですか。その内容として**ふさわしいもの**を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　学生の９割以上の人が「人生や世の中は辛い」と考えていること。

イ　社会に出ていない学生がどうして「人生や世の中は辛い」と思うのかということ。

ウ　学生は親に保護されていて社会人としての経験がないということ。

エ　学生の周りの大人が皆「人生や世の中はつらい」と思っていること。

問５　――線部③「下請けのまた孫請けのような形」とありますが、それを説明した次の文の□に入る言葉を、文中の言葉を使って、**三十字以内**で答えなさい。**（句読点も一字に数えます。）**

学生に「人生や世の中はつらい」と言う大人たちも□ということ。

問６　――線部④「『人生は辛いもの』というのは伝聞情報でしかない」とはどういうことかを説明した次の文の［　１　］・［　２　］に入る言葉を［　１　］・［　２　］ともに**五字**で、文中から**ぬき出して**それぞれ答えなさい。**（句読点も一字に数えます。）**

> 学生はまだ［　１　］社会を経験していないので、「人生は辛いもの」ということは［　２　］であると言い切れないこと。

問７　――線部⑤「夜景」と同じ成り立ちの熟語を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　難問　　イ　往復　　ウ　射的　　エ　切断

問８　［　X　］に入る言葉として**ふさわしいもの**を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　こうした人の話はとても参考になります

イ　こうした人の話を聞いても、何もいいことはありません

ウ　こうした人の話はじっくりと聞くことが大切です

エ　こうした人とともに生活することは成長につながります

問９　筆者が伝えたい内容として**ふさわしいもの**を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　周りの大人はほとんど「人生が辛いもの」と捉えているが、その人たちを責めるのは間違いであること。

イ　「人生は楽しい」と思う人は全体の２％しかいないのは大きな問題であり、その解決策を見つける必要があること。

ウ　世の中に改善すべきことがたくさん残されているから、人生を楽しく、世の中をよくすることができるということ。

エ　世の中をよくするためには、無理をしてでも「人生を楽しい」と考えなければならないということ。

**三**　次の１～１０の（　　）に**漢字一字**を入れ、下の意味に合うように慣用句やことわざを完成させなさい。

１　弘法（こうぼう）にも（　　）の誤り……どんな名人でも失敗することがあるということ。

２　（　　）が重い……ことば数が少なく、あまりしゃべらない。

３　（　　）とすっぽん……二つのもののちがいが大きいこと。

４　時は（　　）なり……時間をむだにしてはならない。

５　類は（　　）を呼ぶ……似たものどうしは、自然に集まるものだ。

６　渡（わた）りに（　　）……望んでいるものが、ちょうど都合よくあたえられること。

７　（　　）にどろをぬる……はじをかかせる。

８　うしろ（　　）をさされる……かげで悪口を言われる。

９　（　　）よりしょうこ……いろいろと言い合うより、実際のしょうこを出したほうがすっきりする。

１０　言わぬが（　　）……口に出して言わないほうが、かえって良い。